

財団法人

住吉隣保館ニュース

No.10

■編集・発行 財団法人住吉隣保館

■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21
 TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし
北特別事業『住吉の古寺を
語る』(1)～(11)

市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

住吉の古寺を語る

- 2 財団法人住吉隣保館の動き
(11)～(12)

講師：松村隆誉さん（莊嚴浄土寺住職）

1月11日13時30分から「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座（市民交流センターすみよし北の特別事業）の第7回として、NPO法人かなえ会理事長池田外美雄さんの司会で「住吉の古寺を語る」と題して松村隆誉さん（莊嚴浄土寺住持）が話された。地元寺院のご住持ならではの博識と通常見ることが出来ない寺院の史料を基にした興味深いお話を伺うことができた。

[なお、この報告は当日の講演を事務局でまとめ、講師に手を加えて頂いた。]

はじめに

本日は、一昨年に住吉の特集をされた大阪市史編纂所・莊嚴浄土寺の発掘調査をされた大阪市文化財協会・中世民衆寺院の一斉調査をされた奈良の元興寺文化財研究所、古くは奈良国立文化財研究所の方々が、いまだ言及されておられない寺院を含めてお話ししたいと思います。私、長年ずっとこのお寺（妙台寺）、つまり「鷹合堂」あるいは「鷹飼堂」は一体どこにあるのだろうと不審に思っていたわけです。たぶん確定的なことと知っているのですが、学者さん方は、それはそう思っているだけのことだと仰るかもしれませんが、私は限りなく正しいはずだと信じています。

住吉社と津守家と三大寺

住吉神社には神殿が4つあります。（大海神社を入ると5つになりますが。）太鼓橋を渡って最初にあるのが第三本宮です。右側が第四本宮、第三本宮の後ろが第二本宮、その後の一番奥が第一本宮です。お正月に皆さんがまずお賽銭を上げて拝んでいるのは第三本宮です。本来は一番メインの第一本宮にお賽銭を上げれば、あとの三つの本宮にお賽銭を上げなくてもよいくらいなのです。

住吉さんは海の神様で、海の表面、中、底の神がそれぞれ表筒男命（第一本宮）・中筒男命（第二本宮）・底筒男命（第三本宮）です。底は水が綺麗で一番大事だということです。右側に、神功皇后が祀られています。今はなくなりましたが、第一本宮にのみ瑞垣がありました。皆さんにお配りした絵図は『住吉名所鑿・界府墨江紀略』（出口神曉編）所収の『住吉名所鑿』（享保2年<1717>刊）の絵図を私が補ったものです。これを見ると第一本宮に特別に門と垣根があります。住吉大社が他の神社に比べて圧巻ではあるが荘重さに欠ける様に思いますが、これは明治になってからの整備のせいだと思いますが、後にまたお話しをします。

住吉神は和歌の神様でもあり、和歌浦の玉津島明神、柿本人麻呂（山部赤人などを挙げる場合もある）と合わせて和歌三神とよばれています。

住吉大社の神主家の津守氏には七つの家がありました。東側の初辰さんの所に入って右（北）に行くと津守氏の大領氏・板屋氏・狛氏・津氏・大宅氏・神奴氏・高木氏七家の社があります。

そのうちのひとつが住吉区大領の大領氏です。本当は大領という字は私のお寺の辺りから住之江味噌の

東隣までです。現在の住吉区大領の地名は、大阪府立急性期・総合医療センター（旧府立病院）の裏にある大領小学校がありますが、そこに2つ大領池があったという縁故と思われる。大領氏は大海神社を掌握していたようです。江戸時代には莊嚴浄土寺に白銀を施入したという記録があり、地蔵さんも寄進してくれています。また莊嚴浄土寺の元禄から享保ごろの住持2人は神奴氏です。中でも高算は本山（西大寺）の管長になり、本山に大きいお墓と2mくらいの軸装された肖像画が今も残っています。国基社奉納和歌が寺に残っていますが、それには、神奴氏は神奴連誰それと署名しています。津守氏は宿禰です。江戸時代ですよ。仁徳天皇や大和朝廷の時代、飛鳥時代初頭の聖徳太子の頃の氏姓制度の姓が、1700年代・1800年代に使われていたということで、神社の世界では、まだまだ伝統的な世界が残っていたということです。

次に三大寺です。三大寺、三大寺といいますがそういう記載は文書には残っていません。資料を読みます。

「住吉社関連の寺院は、津守寺、神宮寺、莊嚴浄土寺、鷹合堂、法興寺（後、津守家より離脱カ？）、慈恩寺、三千仏堂、西琳院、榎津寺、（堺）大寺などあり。莊嚴浄土寺を除き他は全て廃絶（戦国時代から元和の役、或いは明治の神仏分離による）。」10ヶ寺からあって莊嚴浄土寺のみ残ったということです。

『界府墨江紀略』（享保3年正月刊）には「住吉に4本社 44末社 仏堂16宇 棟数173有るなり。修補の役を始する時は則ち公府（江戸幕府のこと）より諸費を賜り、其の臣を遣わして其事をするなり。今挙ぐる所は諸祠、諸館、神宮寺、津守寺、莊嚴寺、皆是棟数100余の中と知る可きなり。」とあります。寺院のうち、神宮寺・津守寺・莊嚴寺の3ヶ寺のみが国費で堂塔の補修がされるということです。これが三大寺という根拠ではないかと思えます。三大寺と書かれた本はあります。昭和28年の『住吉区誌』です。「住吉三大寺」と書かれていました。誰がそういう風に発想をしたのか判りませんが、これはいいと思い、私が勝手に昭和55・6年ぐらいから使い始めました。だんだん考古学者。美術史家の方々が使い始め、三大寺が脚光を浴びてきました。最近勝手に独り歩きしているようにも思っていますが、ここまで来たらもう引きもどせませんね。

住吉の古寺（六ヶ寺）

次に住吉の古寺、六ヶ寺についてです。最初に津守寺、別名瑠璃寺、天台宗です。住吉社関連の寺院は基本的には天台宗です。今の墨江小学校のまえ

に津守寺旧址という碑が立つようになりました。その昔は、墨江小学校と沢ノ町駅をまたいでもう少し東の市営住宅の建っている辺りでよく瓦が出ていたという話がでていました。『かもしか道』で有名な藤森栄一さんや大阪府の文化財を担当されていた藤沢一夫四天王寺国際仏教大学名誉教授などが津守寺の瓦をお持ちなのですが、昭和22.3年ごろにご覧になった時にその場所を見間違われたということで、津守寺の址に墨江小学校が建ったということです。出てくる瓦は白鳳時代、西暦700年前後のやや形式化した瓦です。何故瑠璃寺かという本尊が薬師如来だからでしょうか。薬師如来は薬師瑠璃光如来といわれます。もう一つ大理石の礎石が出てきたという話もあるので、よく輝いた大理石を瑠璃の石といったのかもしれませんが、ついでながら、ガラス製壺・唐三彩・瑠璃瓦が考えられますが、余りにも貴重、高価で論外だと思います。寺名の起こりはまず本尊薬師、次に礎石のどちらかです。

二番目は神宮寺、別名新羅寺、天台宗です。皆さんは朝鮮系かといわれます。この頃は教育で大分変わりましたが、戦前や戦後間もなくは朝鮮や中国を下に、ヨーロッパを上にと文化度の差を見るという風がありました。これは近年の事で、女王卑弥呼や大和朝廷の時代、聖徳太子や東大寺の大仏殿の頃には日本が一番文化度が低く、一番文化度の高いのが中国で、その次が朝鮮で、一番野蛮なのが日本です。ですから新羅寺ということは恥ずかしくないわけです。先程、津守七氏のなかに狛氏がありました。京都の南、木津川沿い、奈良に接する辺りに上狛・下狛がありますが、上狛に国の史跡になっている高麗寺跡があります。高麗と書いてコマと読んでいます。高麗系の人の本拠が木津川沿いのあの辺りにあったのです。ただ、住吉社七家の狛氏と木津の上狛・下狛との関連は私には分かりません。話を戻して、神宮寺は天平宝字2年（758）新羅から持ち帰った薬師さんを本尊とし創建されます。神宮寺の記事としては、『日本三大実録』に貞観8年（866）2月に神前読経がされたこと、『扶桑略記』に天慶3年（940）3月に兵乱鎮定の祈祷がされたことが記されています。この兵乱は藤原純友・平将門の乱のことです。この神宮寺のことについては色々な資料が残っています。あと、神宮寺にあった西塔（多宝塔）が徳島の切幡寺（四国八十八ヶ所十番札所）に移築されて、国の文化財になっています。豊臣家の財を削って建てられた塔です。神仏分離で住吉神社が売ったわけですが、神宮寺の遺物として唯一残っています。

三番目は莊嚴浄土寺です。住吉堂とか国基堂と落慶の時に呼ばれます。今は真言律宗（真言宗の西大寺派）ですが、最初はやはり天台宗です。落慶時に、天台比叡の僧侶、天皇の使い、検非違使など、名前や誰がどうしたといったことが全部判ります。永長元年（1096）3月7日に落慶するのですが、その時の記事が『中右記』（中御門右大臣藤原宗忠の日記）など七つの記録に残っています。市史編纂所に行かれたらまとめて史料を出してくれるはずです。住吉の第39代神主津守国基が莊嚴浄土寺を建てられました。この人が一番偉い神主さんです。和歌の達人でもあったし、一番財力もありました。今、初辰さんの北側に薄墨社という一番大きい祠がありますが、これが国基の祠です。本当は明治40年まで莊嚴浄土寺にありました。寺の西側に保育所がありますが、そこに、寺の方（東）を向いて建っていました。ですから、あの辺りも発掘調査の対象地になります。もう一つ坂の下にあった竜王さんも明治40年にとられます。移転先は生根神社でお参りに行かれたら左側の奥に竜王社があります。もう一つ玉津島神社が有るのですが、莊嚴浄土寺から北側に100mくらい行くと、昭和23年ごろに売った浄土寺山（弁天塚古墳）という山があります。その山の上に東大禅寺さんが引っ越ししてきて建っています。本当はあそこに玉津島神社があったわけですが、今でも「青石の玉津島社」という碑だけが残っていて、お願いして青石を守って頂いています。莊嚴浄土寺は廃仏毀釈で潰れはしませんでした。建物のあった所のみが残っているだけです。江戸時代の終わりにでも800坪や1000坪の土地があったのですが、坂の下の土地（龍王社と池）や駅にかけての所など全て明治40年までに社領地ということでとられてしまいました。新しく判ったことは永久4年（1116）国基の子第40代広基は国基の遺言を守って田畑32町を寄進したこと、安貞2年（1228）第46代津守経国が播磨国久米荘の年貢25石を寄進したこと。法要のために持ってきたということのようです。莊嚴浄土寺は最初から八町（800m）四方で作ったと言われていいます。田畑32町は550から600m四方くらいということになるでしょう。寺を維持するための田畑を含めて八町四面くらいの土地を寄進したと解釈すればいいわけで、ちょっと大げさに言ったのでしょう。莊嚴浄土寺の北側は住吉車庫の東西ラインで、その信号の西を入った辺りの字名は靈鷲山（釈尊が法華経などを説いたという山）で周辺に出口・敬田・北門とあり、住吉車庫の高台辺りが寺域の北限といえます。東の13号線を越えた辺りが字仁王前です。東向きに仁王門が建っていて、お寺の門前ということに

なります。お寺の敷地が分かるわけで、住吉さんがそれくらい大きなお寺を建てたということです。

文応元年（1260）に莊嚴浄土寺は西大寺に変わります。住吉さんは1245年ころから西大寺に急接近します。今はマイナーですが、鎌倉時代を勉強される人は南都西大寺を避けて通れません。皆さんのお墓から、五輪塔や宝篋印塔（ともに供養塔・墓塔として使われる仏塔の一種）、薬にいたるまで、西大寺の影響力は大変大きいです。初めて豊心丹という丸薬を作ったのは西大寺で、大茶盛（西大寺を復興した叡尊が始めた）もそうで、お茶を持ってきたのは栄西さんですが、広めたのは西大寺です。住吉さんが何故西大寺に接近したか。瀬戸内海の内海運を全部握るわけですが、西大寺は海上・陸上交通の実権を全部握ります。西大寺の後ろ盾は北条氏です。源氏も周防・長門の大内氏や鎌倉の御家人も西大寺を守ります。横浜の金沢文庫のあった称名寺も西大寺派の別格本山です。足利氏も西大寺を守ります。この大阪辺りでは河内源氏・多田源氏もそうです。1290年くらいになってくると北条氏は関東御祈禱寺院を決めます。鎌倉幕府を守ってくれる寺を決めるわけですが、

その文書を見ると、ほとんどが西大寺末です。他の寺といえば唐招提寺・壬生寺ぐらいでパラパラです。四天王寺の西門の鳥居は忍性（叡尊の弟子）が建て、瀬戸内海の生口島にある石塔もそうです。女性が往生できるというのも西大寺の叡尊が決めたことです。今、日蓮宗であろうが、天台であろうが、浄土であろうが、禅宗であろうが、戒律はどの宗派も根幹です。鑑真さんが持ってこられて廃れてきて、華嚴系の笠置の貞慶さんや明恵さん達が元祖張られますが、西大寺の叡尊、興正菩薩（叡尊の諡号）の時に復興、大成します。その時初めて女性が女性のままで成仏できると決めたわけですが、浄土宗の人は五重（五重相伝：信者となる儀式）を受けに行くとありますが、ああいうシステムを叡尊が下ごしらえされたのです。戒律はどの宗派も持ち合わせていますが、それを分かり易く普及したのが叡尊です。その弟子の忍性はハンセン病患者の救済や非人への炊き出しを師匠の叡尊とします。この辺だと譽田八幡・家原の文殊さんとか久米田寺とかで炊き出しを1000人単位でしています。久米田寺、家原寺とかは、西大寺に足を向けられない程の恩を被っています。古市の西琳寺もそうです。

戒律というのは皆が守らなくてははいけません。叡尊は何を決めたかということ、みんな真面目にしないということです。キリスト教の人は判ると思いますが、懺悔すれば許されます。仏教もそうです。済

みませんといえば許されるのです。戒律は心の中のことで、見えませんから難しい。守っています、といっても守っていない。でも守ろうとしたけど守れなかった、といえば言いわけが成り立ちます。これが戒律のやっかいなところです。本当に戒律を守って精進しようとしている人と、本当は精進したくないけれど口だけで言っている人と区別はつきません。禅宗の人に叱られますが、禅宗は西大寺の興正菩薩や鎌倉極楽寺の忍性菩薩の生き方を手本としました。禅宗、西大寺の両者共に戒律を基盤としていたから大変仲がいいわけです。違うのは、普通に黙って掃除をすればよいのに、ダツタダーと走り回り、一挙手一投足を定型化したことです。皆さん方から見れば、あそこは厳しくてきっちりしていると写ります。私から見れば、掃除するのにあそこまでしなくてもいいと思う時があります。本当をいえば戒律は下着のようなもので何色を着ているのか判りませんし、今日食べてきたものが何か、胃袋の中は判りません。それを表に出し、辛い修行・作務を頭で考えさせない儀式の有り様は、いかにも格好よく、羨ましい限りです。

建治元年(1275)7月住吉さん、つまり津守家で内紛があったようです。先程挙げた10ヶ寺ぐらいのお寺におかれた管理者を別当職といいます。それを誰が継ぐか、一統が多いので揉めているわけです。翌年11月2日に争いに負けた津守順盛は莊嚴浄土寺に戻ってきて自害しています。当時は負けた方は自害するか遁走するしかありませんというところですか。

建治元年(1275)には叡尊が莊嚴浄土寺に来ています。その後、後醍醐天皇の追善法要が行われた記録もあります。その頃、正平の大地震(正平16年、1361)で莊嚴浄土寺の仁王門は倒壊しています。四天王寺は金堂が倒れました。天文年中、1550年くらいに莊嚴浄土寺を住吉四天王寺と記した記録(『親俊日記』)、あと慶長11年(1606)豊臣秀頼が本堂を再建した記録もあります。

次に妙台寺(鷹合堂)についてです。今日のメインのお話です。住吉さんの記録では鷹合堂しかありません。長居公園通りを東の方にいくと鷹合町があります。生駒孝臣氏の論文「平安・鎌倉期の住吉社境内寺院と津守氏一境内寺院別当職の変遷から—」(『大阪の歴史』第75号 2010年8月 大阪市史編纂所)に鷹合堂について書かれています。論文の表題通り、別当職の変遷から見た住吉大社と津守家の動きを詳しく追求されていますが、まだまだ不明なところも多い、とも述べられているのを読みました。西大寺に『西大寺諸国末寺帳』(奈良文化財

研究所 昭和43年調査資料)があります。明徳2年(1391)摂津国の部には莊嚴浄土寺の上、筆頭に妙台寺が書かれていて、鷹合と註記があります。西大寺の末寺であるのに、妙台寺に興正菩薩や忍性と色々な人が詣でたという記録も無く、突然妙台寺とあり、なんだこの寺はという感じです。莊嚴浄土寺の後には薬師院が書かれています。これは、四天王寺です。四天王寺全部ではありませんが一部が西大寺の末寺でした。次に多田院が書かれています。この後の『西大寺諸国末寺帳』にも莊嚴浄土寺の上に妙台寺が書かれています。この順序(摂津国の場合は南部から北へ)は薬師院や多田院からみると、寺の格(元関東御祈祷寺院)から考えてけしからんわけで、鷹合にそんな重要な寺院があったのかということです。妙台寺が莊嚴浄土寺と同じく住吉神社関係寺院なら別です。

興福寺の記録『大乘院寺社雑事記』に文明2(1470)8月13日、光明真言会が行われ、出仕したお寺の名前が書かれた「光明真言会 結番帳」の四番、第四部隊として莊嚴浄土寺の前に妙台寺があり、後ろに大御輪寺、鳳の長承寺が書かれています。大御輪寺は廃仏毀釈で潰れましたが、桜井の聖林寺の国宝十一面観音像が本来大御輪寺の本尊でした。明応3年(1494)の記録でも妙台寺と莊嚴浄土寺から光明真言会に出仕します。妙台寺については西大寺の者も判らない、奈良文化財研究所・元興寺文化財研究所の研究でも指摘されていない。前述の生駒氏も妙台寺までは言及されていない。そういうことで妙台寺なんて誰一人として指摘をされたことはありません。しかし、妙台寺の横に鷹合と書かれており、まず99パーセント間違いないと思います。いま住吉神社に行かれる時は正面から行かれますが、本来は前が海だから大方は東から行かれるわけです。王子神社からは、今の13号線を使うか、西長居の方へ出て上住吉、莊嚴浄土寺を経て住吉さんへお参りします。その休憩のために莊嚴浄土寺があるわけです。住吉さんは宮島の厳島神社のようにして建っていたわけです。莊嚴浄土寺は住吉さんの東に作られ、しかも東向きに(今は南向きですが)、13号線を向いて建てられています。沢之町の若松神社の社殿も東、13号線の方を向いています。王子神社から考えて貰えば、王子神社・莊嚴浄土寺・上住吉・若松神社(止止呂文比売命神社)と辿ると、熊野街道にあたり、遠里小野に抜けられ、堺の王子に行けます。本来この道がメインであろうと思います。鷹合堂が造られたということは、もっと東側、長居公園の向こう側、行基橋に行く西高野街道のルートの方が大事だったということです。鎌倉時代後期に

なると、住吉神社と西大寺の密接な提携から、住吉神社・莊嚴浄土寺へ行く途上に、休憩する場所が鷹合にあったわけです。今の美原・丹比・道明寺・古市へ行こうと思うと大和川を越えて、長尾街道に入りたいわけです。美原・丹比は西大寺の拠点であり、そのまま古市へ抜けられます。上之太子、叡福寺も西大寺末ですから、法隆寺からのルートなど住吉さんへ来るルートには全部西大寺末のお寺が確保されているわけです。そう考えると鷹合堂といわれる妙台寺もポイントになっていたということです。南の家原寺の文殊さん（西大寺の五戒壇の一つ）でしたら、そのまま竹内街道とか長尾街道に入ればよいわけです。

そういう歴史的なことが15世紀の終わりまで続いていたことを考えれば、妙台寺というお寺は住吉神社が建てた鷹合堂に間違いのないのだろうと思います。つまり、住吉神社（津守家）からは鷹合堂建立目的の達成感、利益であり、西大寺側からは妙台寺の包摂化、末寺化の利益といえます。そしてこの異なった利益を両者が共有できたことを物語っているといえます。ではそんなお寺がどこにあるかといえ、どこにもなく、何時無くなったかもはっきりしません。莊嚴浄土寺の前の道は磯齒津道といって1800年からの古い昔のメイン道路といわれています。この道は西長居まで抜けて今の長居公園通りから矢田の方に向かっています。そのルート上の所と考えれば、今の矢田駅のちょっと東側に神社があります。長居公園通りでいえば湯里の交差点を南に行くと神社があります。私は以前から、ここには寺か何かあったのではないかと思っていましたが、この頃平安時代の寺があったことが判っています。鷹合からちょっと離れていますが、それほど離れているわけではありません。平安時代のお寺があったわけで、ひょっとしたらあの神社の横にあったお寺が妙台寺かもしれません。本当は、鷹合の住宅の中で何か出てくればいいのですが。住吉神社の史料には鷹合堂としか出てきませんが、本来の名前は妙台寺だと思います。1101年に、莊嚴浄土寺を建てた直後に同じ人(国基)が建てています。第1代の別当も莊嚴浄土寺の初代別当と同じ人(増命)です。妙台寺、妙なる台うてなという寺の名前からみて阿弥陀さんのお寺でしょうか。『観音経』に観音の妙智力が能く世間の苦しみを救うとありますが、この「妙智力」からだ観音さんかもしれませんね。

次に西琳院です。寛喜2年(1230)第46代神主津守経国が創建しました。創建時から西大寺末であったとは言いにくいです。この時、興正菩薩は30才で、大きく飛躍するのは35才です。唐招提寺のう

ちわまきの由来の覚盛上人かくじょうは戒律復興の同志です。覚盛上人が50才で亡くなり、西大寺の僧や法華寺の尼僧たちがうちわを作って供養したのがうちわまきの始まりです。西琳院が遠里小野村にあり石灯籠があるという元禄年間の記録があり、尼寺であることが判っています。津守家の娘さんが法華寺・道明寺・莊嚴浄土寺で、男子は神宮寺・津守寺・莊嚴浄土寺で得度して、百人はいることが研究で掌握されています。後村上天皇が「我たのむ西の林の梅の花・・・」と詠んだことは『住吉名勝図絵』に載っています。後醍醐天皇が寄進された建武3年(1336)銘の石灯籠がいま極楽寺内にありますが、極楽寺では楠木正成が寄進したといわれています。正嘉元年(1257)に興正菩薩が西琳院に行っています。莊嚴浄土寺の愛染明王(大阪府有形文化財に指定)は西琳院の本尊でした。胎内銘には嘉元元年(1303)神宮寺で造立され、正中2年(1325)彩色され、西琳院護摩堂の本尊とあり、仏師や絵師の名前とともに奉行、忍禅と書かれています。忍禅は興正菩薩の弟子の尼僧です。西琳院が焼けた時に住吉さんが再興しなかったのも、莊嚴浄土寺に持ってこられたのです。石灯籠も持ってくればよかったのと私は思っています。余談ですが、極楽寺では楠木正成が寄進したと伝わっていますが、寄進者は、後醍醐天皇です。お寺の縁起を見ると、しばしば建立したのは聖徳太子・行基・お大師さん・伝教大師・性空上人(書写山圓教寺)・法道上人(堺、鉢ヶ峰の法道寺)などで、仏像だと定朝・運慶・快慶の作といわれる場合が多くあります。誰かその絡みの人が作ったという事があるかもしれませんが、多くは権威づけといえます。太閤秀吉が出世して、自分の出自を源氏だといったことや、日本の温泉でお大師さんや行基さんの伝承があるところは何百ヶ所もあり、行けるわけがないのと同じです。知力・正義・戦上手のシンボリック武将の楠木正成が寄進したと聞くと私はやはりふと不審に思います。南朝が正しく、足利尊氏が悪者にされた教育を受けましたが、よく考えると吉野の山にいる天皇さんが正しくて、京都にいる天皇さんが正しくないというのは変ですね。楠木正成というと毘沙門さん、信貴山が繋がります。強い楠木正成の寄進というより後醍醐天皇の寄進という方が上品ではないかと私は思っているのですが。

次に榎津寺です。慈恩寺建立と同時に禅宗(大徳寺末)に変わります。発掘調査が行われ、掘っ立て柱の遺構・白鳳期の瓦が出ています。

以上見てきましたが、莊嚴浄土寺が創建者の名前を冠して国基堂と呼ばれた様に、住吉社の重要寺院

にはいずれも別称が冠せられていることは注目に値します。

その他の寺院 (四ヶ寺)

住吉では我孫子の観音さんを挙げなければいけないのかもしれませんが、他の四ヶ寺について少々お話しします。最初に呉坂寺です。行基菩薩の建てられたお寺の一つといわれています。三千仏堂、大海神社の近くに有ったといわれています。行基菩薩建立の伝承のあるお寺は49寺だったと思いますが、その一つです。

次に慈恩寺です。住吉さん絡みのお寺で、鎌倉時代の禅宗です。余りの桜の見事さに、後醍醐天皇が車駕を返したことで有名です。

次に天野谷寺です。今、住之江味噌の南側に西の坊というお寺が建っています。門を入ったら正面すぐに金神さんという神さんが祀られています。方違いさんです。神様を祀っていたということでこのお寺は廃仏毀釈を免れています。本来このお寺のメインはこの神様でした。室町時代、145,60年に住吉さんの一部が燃えて、お金を集めなければならない時期に、ちょうど住吉に来られた僧が五人集まって西の坊周辺に住み着き、住吉神社の資金調達に駆け回り、住吉神社に寄進して、住吉神社が再興します。ですから勧進聖と呼ばれています。江戸時代の莊嚴浄土寺の過去帳を見ても北之坊と南室そして辻之坊(?)という名が残っています。僧のお墓も住吉霊園やと千躰墓にあります。西の坊さんは平安前期ごろの創建と寺伝ではなっていますが、たぶん神宮寺や前身寺院の由緒が入ってそうになっていると思われる。1450年ごろには存在していたことは確かです。

次に四つめは地蔵院です。江戸時代の創建です。これは浅沢神社南側の地蔵院さんとは関係ありません。住吉の快円は有名な僧です。江戸時代に真言律宗を名乗る寺はたくさんありますが、鳳神社の大鳥派です。高野山の真別処、円通律寺には快円のお像があります。戒律系で快円は超有名です。江戸時代に戒律を勉強するには西大寺・京都泉涌寺・唐招提寺へ入ります。この他にも西大寺から分派した野中寺(中の太子)一派・神鳳寺(大鳥)一派・紅葉で有名な西明寺一派が大きな影響力を持ちました。それと東京では文京区に靈雲寺というお寺があります。開山は浄嚴で、真言律宗という名称を始めて

使ったのはこの人です。河内長野の延命寺の辺りの鬼住村出身で上田氏です。修行を高野山でしましたが、西大寺の僧になり、八尾の教興寺(西大寺末、秦氏)を復興します。住吉にも来て、快円とも絡みます。その後、「夕映えの紅葉」で有名な延命寺を造ります。將軍綱吉に招かれ、何故真言律宗なのかと尋ねられます。「魔道に堕ちないために戒律を守る。」と言います。道教とか景教(ネストリウス派キリスト教の中国での呼称)は火を使いますが、ちょっと幻覚的、現世的です。これを取り入れた密教も護摩を焚きます。あなたの運命が変わるなどと言って金儲けをする人は魔道に堕ちているということになります。これは僧ではありません。心を治すのが僧であって、修行で体が飛ぶ、というようなことを言ったり、行者さんが護摩を焚いて、「見えません」と言ったりしていますが、こういうのを魔道に堕ちていると言います。魔道に堕ちないようにどうするかというと、自分で自分自身を高める訓練をするということ、つまり、戒律が基本で大事であることとなります。鑑真さんが持ってきて、西大寺の興正菩薩が再興した戒律は自己反省が大事であるということであり、心を治さず魔道に堕ちている、このことを外したかった、そして目的だと浄嚴さんは將軍に答えます。その結果、真言律宗という名称が江戸幕府から認められます。綱吉は戒律を守ることを保護します。本当は徳川家は天台か浄土ですが、西大寺なども保護されます。浄嚴さんのお陰です。関東一円の真言律宗は50ヶ寺以上ですが、先程ふれた靈雲寺が本山となります。一方、真言の僧としても空海以来最後の超巨匠です。將軍綱吉の母桂昌院のお堂なども西大寺末か唐招提寺末の律系の末寺になります。その結果、不殺生戒が少し行きすぎて犬公方といわれたのです。僧、隆光(東大寺戒壇院出身)が護持僧として綱吉のそばにいて、京都・奈良、住吉さんを含めた色々な神社や戦国時代に荒れた寺が徳川家の財政で復興していきますが、それらも連動した浄嚴さんの功績でもあります。犬公方の面のみ強調されていますが、文化的な面では貢献度が非常に高いのです。一生懸命何かしていても、自分だけが偉いのではなく、みんなのお陰であるということ意識すれば魔道に堕ちないということを感じておいて頂きたいと思います。

附録資料

あと資料に付けた附録の説明をします。まず神仏習合（日本固有の神の信仰と仏教信仰を融合調和すること）の表です。

<附録>

1. 神仏習合

社殿	祭神	神木	神徳	経題	本地仏 ※1	所在地
第一	底筒男命	松	慈	妙	薬師（=観音）	金堂
第二	中筒男命	栢	悲	法	阿弥陀	三千仏堂 ※2
第三	表筒男命	桂	喜	蓮	大日	神宮寺（大日堂）
第四	神功皇后	楠	捨	華	十一面観音	奥天神 ※3

※1— 本地仏は本来は神宮寺内 江戸時代よりは上記表

※2— 神宮寺阿弥陀仏 → 慈恩寺本尊に（慈恩寺が本尊を制作した為）→ 榎津寺へ（元和の役で焼失）→ 三千仏堂

※3— 奥天神とは大海社北方の生根神社のこと（観音堂）

神様の功德が書かれた「神徳」の欄に慈・悲・喜・捨とあります。大慈大悲観世音菩薩といいますが、慈と悲はどう違うか考えました。慈は無条件に許せるということ、悲はこよなくいとおしむということでしょうか。自分の子どもは懐の中に入れて慈愛を以てだっこしますが、これが慈ですが、他人に対していつくしむ心が大悲の心といえます。大悲闡提（一切衆生を救うため、自ら成仏を取り止めてあえて闡提く仏法を信じず誹謗する者）の道を取った仏の心というのがあります。玉虫厨子の「捨身飼虎図」は飢えた虎を助けるために自分が飛び降りて餌になるという聖徳太子の逸話ですが、自分の命より相手の命を助けるわけで、あれが悲で、「大悲闡提の心」です。お布施を喜捨といいますが、自分を捨てて人のためにできるということです。

経題とありますが妙・法・蓮・華ですから法華経です。大乘経です。全宗派使いますが、特に日蓮宗の人にとって重要です。どのお経を以て宗派をたてるか、悟りの境が得られるか、例えて言えば金剛山に登るのに色々なルートがありますが、法華経という乗り物で登ったと考えればよいと思います。浄土系の人は浄土経で金剛山に登る、到達地点はいつしょですが、道すがら使うお経が違うわけです。法華経はお釈迦さんの最晩年のお経です。人生の終末が見えてきた時のお経が人生訓だと思った宗派やお釈迦さんの若い時の阿含経を拠り所とした宗教と色々あります。

本地仏（仮の姿で現れた神に対応する本源の仏）はそれぞれ薬師・阿弥陀・大日・十一面観音で、所在地は金堂・三千仏堂・神宮寺・奥天神ですが本当は神宮寺に各お堂があったのです。日本はもともと神国といわれ神の国です。三輪さんでも判るように山をご神体にし、木や石もご神体にします。それを自分達の心の拠り所、依り代として考えます。6世紀半ばに仏教が入って来ます。仏教は組織化され教えも体系化されていて、エリート的な文化がはいつてきたということです。空海や最澄

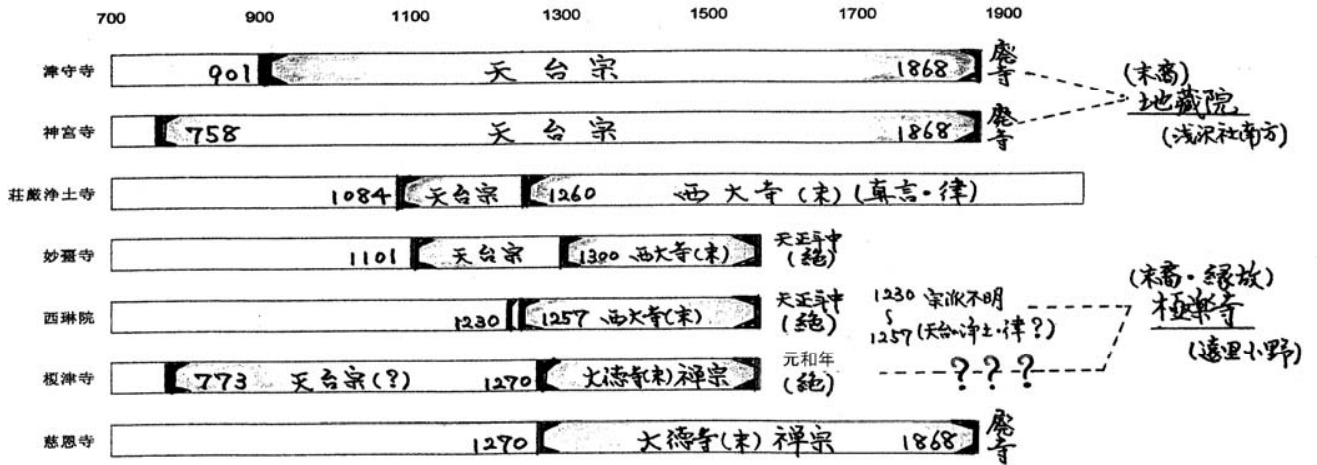
が登場すると、神仏習合が進みます。皆さんもそうだと思いますが、虫一匹、草一つでも自分達と同じ命だという発想があり、無駄に虫を踏んではいけないといった発想は神道でも仏教でも一緒です。そういうところが共通しているので神仏習合がおこります。日本の神様は仏教が入る前に仏教を広めるための先兵、偵察隊となって先に日本にやってきていて、後で仏さんがやってきたということです。仏教から言えば、住吉さんのように大きな神社でさえも「おまえ達ご苦労さんでした、」ということになります。神仏習合の世界からいけば、仏の方が神より地位が高いのです。神の方が日本に先に住んでいて、仏が入ってきたらそれは仏さんのお使いだったということになって、神宮寺が建てられるのです。資料の表にある神功皇后も観音さんの化身で、本体は観音さんであり形としては神功皇后として現れたとしています。

明治になって日本は神国だと日本政府は一生懸命言います。しかし、人間の頭は100年・150年で変わらないわけです。政府も神社もお寺より神さんの方が大切だと言うのですが、庶民はお寺からも離れません。神を奉じる神社側にしたら非常に不満なところだと思います。アニミズム的な精霊信仰・祖霊信仰のところに、6世紀半ばに理論化された仏教が入って来ました。明治になってキリスト教が入って来た時に、仏教よりキリスト教の方が偉く見えたような状況が、6世紀半ばから800年頃にあったと思えば整理できます。文化度の差です。

第二本宮の本地仏について変遷を見ます。神宮寺の阿弥陀仏が慈恩寺の本尊に貰い受けられるのですが、慈恩寺が本尊を造ったため、榎津寺へ譲られます。そして榎津寺が元和の役（1615年）で焼失して本来の仏さんが無くなり、近くの三千仏堂に阿弥陀さんが祀られていたのでこれを本地仏にしました。

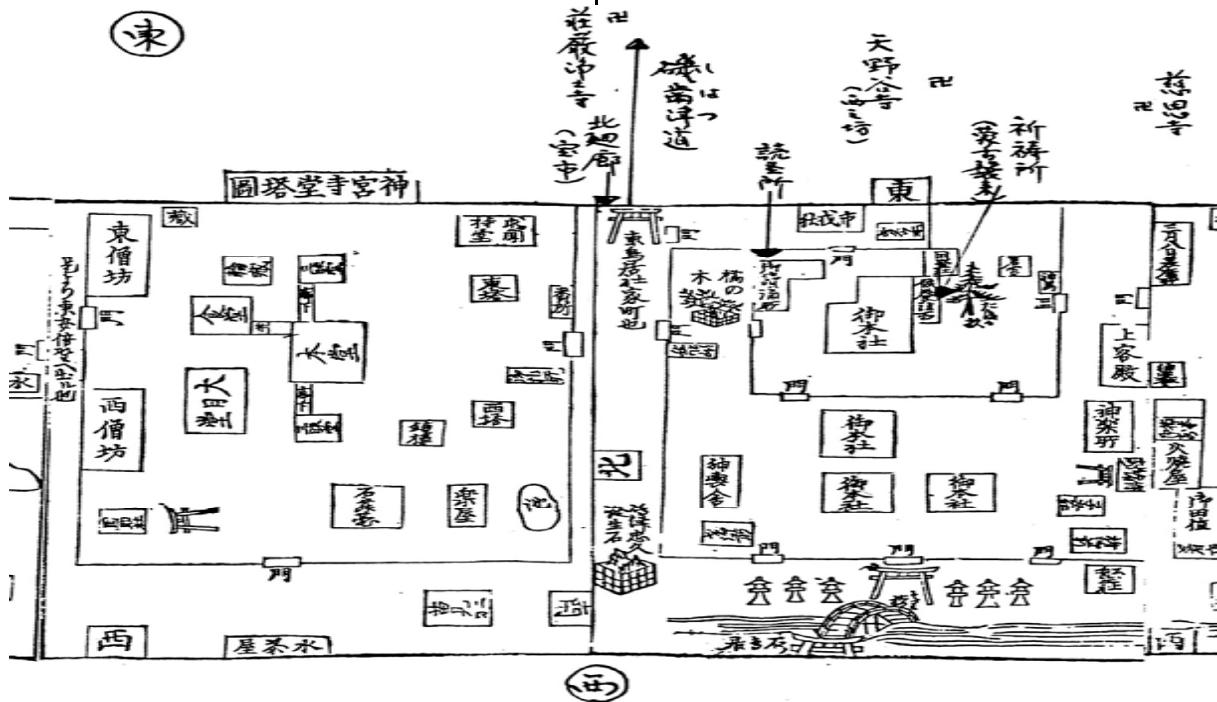
次に六ヶ寺各寺院の遷り変わりの表です

2. 各寺院の遷り変わり



各寺院のスタートの時点と廃寺になった時点を表にしました。津守寺・神宮寺は明治の廃仏毀釈で廃寺になり、両寺の仏さんの一部を貰い請けて造ったのが浅沢神社の横にある地藏院さんです。次が莊嚴浄土寺で、今残っています。妙台寺・西琳院は天正年中、榎津寺は元和の役で絶えています。再興されなかったということで「廃寺」と区別して「絶」と表現していましたが、榎津寺かその後身(あとでできたお寺)が鎌倉時代ごろには遠里小野辺りにあったのではないかとされています。西琳院は「院」ということですので大きいお寺の中にあつたとも考えられます。つまり、榎津寺の中に西琳院があつたのではないかとされています。今の極楽寺さん辺りには、安楽寺・西方寺・安養寺と密集し、何れも阿弥陀さん

す。最後の慈恩寺も廃仏毀釈で廃寺です。先程毘沙門さん・石灯籠があるといいました極楽寺さんですが、大きな楠もあります。もともと西琳院には大きな楠があつて石塔があるといわれているので、ここ極楽寺が西琳院のふるさどであるといわれています。榎津寺は最初は南海高野線よりまだ東南、大和川の土手に近いです。高台で海が見えて、夕日が沈んで、西向いて、阿弥陀さんが迎えてくれたといった発想があつたのでしよう。榎津寺が極楽寺に引き継がれて↑いるといえ言えないことはないと思うのですが、一応クエスチョンマークを入れています。この表は便利かと思ひます。あと一つ住吉神社の図面です。



住吉名所鑿 畠墨江紀畧 享保二年刊(1717)

[なお、絵図については誌面の都合上、当日配られた絵図の中心部分のみ掲載している。]

享保2年(1717)刊の絵図(『住吉名所鑿』)に東西南北・奥天神(生根神社)・大海神社・莊嚴浄土寺・磯齒津道・天野谷寺・慈恩寺・津守寺・後村上天皇行宮(仮の皇居:正印殿)の跡などを私が書き込んだものです。住吉大社のところを見ると、第一本宮が垣根の中に入っているのがみえます。祈禱所と書いているところは蒙古襲来の時に西大寺の興正菩薩がご祈禱をした跡です。五大力さんに杉が残っていますが祈禱所の横に杉と書かれています。石舞台の所は蓮池と書かれています。

このようにしてこの図面を見ると、住吉大社は莊重・閑寂・莊嚴そのものです。その要因は、絵図にある東鳥居から真っ直ぐ西に延びた北回廊の役割が大きかったのだと思います。(絵図に基づいたご説明がありました。詳細は略しています。:事務局)

おわりに

本日お配りした附録資料を持って住吉さんにお参りに行って下さい。かなり学び、遊べると思います。100パーセント正確とは言いませんが、これを参考にして書き加えていければ、ご自分の資料になると思います。今朝の産経新聞の大阪市内版に今日の講演のお知らせと大阪歴史博物館で開催中の特集展示「摂河泉の古瓦」のお知らせを当方より掲載させていただきました。古瓦展では莊嚴浄土寺と神宮寺さんの瓦が展示されています。榎津寺や津守寺の瓦が出ていたらよいのですが残念ながら出されていませんでした。楽しくない話で申しわけありませんでしたが、絵図はお役にたつかと思しますのでご利用ください。

財団法人住吉隣保館の動き

昨年10月27日、市民交流センターすみよし北の大ホールにおいて、420名を超える人びとの参加を得て、「財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年」記念集会在開催されました。この集会の冒頭で、同記念事業実行委員会の友永健三財団法人住吉隣保館理事長が挨拶しました。その中で、住吉地区の人権のまちづくりの歴史を簡単にまとめています。今号では、その内容を紹介します。

「財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年」記念集会・ごあいさつ

記念事業実行委員会代表 友永健三



(財団法人住吉隣保館理事長)

何かとお忙しい中を「財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年」記念集会上にご参加いただきました皆様、大変ありがとうございます

ございます。

また、本記念集会上に駆けつけていただきましたご来賓の皆様にも心から御礼を申し上げます。

さて、本年は、財団法人住吉隣保館設立50年、またこの財団設立だけでなく、地元住吉地区における部落解放運動の立ち上げに中心的な役割を果たされた故住田利雄さん生誕100年という、節目の年にあたります。

このため、昨年7月から住吉地区における関係団体が集まり、実行委員会を立ち上げ、様々な取り組みを積み重ねてきました。具体的には、①住吉部落の歴史と解放運動の歩みをまとめるチーム、②財団50年の歴史をとりまとめるチーム、③故住田さん100年の冊子をまとめるチーム、④「財団設立50年、故住田さん生誕100年」記念集会・レセプションを成功させるためのチーム、の4チームを編成し、それぞれ数回に及ぶ会合を積み重ねてきました。

本日の集会上と、皆様方に配布しました冊子『忘れてはならない自主解放』が、その集大成です。

実行委員会を立ち上げ、様々な取り組みを積み重ねてきた狙いは、以下の3つでした。

一つは、財団設立50年と故住田さん生誕100年の歴史を整理することによって、住吉地区において部落解放、人間解放を目指し取り組んできた先人の精神と取り組みの経験から学ぶことです。

二つ目は、この作業に、一人でも多くの人びとに関わってもらい、人と人のつながりを強化することです。

三つ目には、以上二つの成果をもとに、これからの住吉の地における人権のまちづくりに役立てることです。

さて、本日皆様に配布しました冊子にまとめてありますが、住吉地区のまちづくりは、これまで3つの時期に区切ることができます。

第一期は、戦前です。1918年の米騒動で、住吉地区は部落差別に基づく冤罪によって12名者もの犠牲者を出しました。そのことの見返りという意味もあったと思われませんが、水平社創立の翌年の1923年から11年間、住吉地区では、地区改善事業が実施されました。これは、全国20カ所の中の一つ、大阪では住吉だけでした。具体的には、道路の拡幅、木造平屋の市営住宅の建設、託児



地区整理事業によって整備された道路

所、青年会館の建設等が実施されたのです。しかし、最終的には、当初目標の六割にとどまりました。

第二期は、1953年に共同浴場であった「青年湯」の改修のために、大阪市同和事業促進協議会に参加し、1956年には住田利雄さんを中心に6名によって部落解放同盟大阪府連住吉支部が結成され、まちづくりが取り組まれた段階です。この時期に、住吉地区で最も劣悪な住環境に置かれていた「キタキ」と呼ばれていた一画に、鉄筋4階建ての市営住宅1, 2号館が建設されました。また、様々な活動のセンターとして、1960年に隣保館が建てられ、その管理運営主体として翌年の1961年に、財団法人住吉隣保館が設立されたのです。

住吉隣保館の管理運営方式は、全国的にも珍しい「公設置公費民営方式」と呼ばれるものでした。その内容は、隣保館を建て、管理・運営するための予算は国や自治体が出すが、人の採用や実施する事業の内容は民間、住吉の場合は、財団法人住吉隣保館が決めて実行するというものです。この方式の提唱者は、隣保館の館長であり、財団の理事長であった住田さんでした。住田さんによれば、住吉地区の実情に精通している人材が、隣保館を管理運営していくことが、隣保館本来の目的を実現するのに最もふさわしいという主張でした。

事実、隣保館の役員、職員が住吉地区住民とともに、隣保館に集まり、討議し、学習していく中で、地区住民の自覚が高まり、様々な要求組合が結成されていきました。この結果、住宅や保育所の建設が進むとともに、高校へ進学する人



建設当初の住吉隣保館

が増大し、公務員として採用される人が拡大していきました。

1969年には、同和対策事業特別措置法が制定され、国や自治体をあげて部落問題に取り組むこととなりました。このようななかで、住吉地区においても1972年に地区住民が参加した部落実態調査が実施され、1973年は総合計画実行本部が設置されました。

そして、6つの原則に基づくまちづくりに取り組まれることとなりました。これが、住吉地区におけるまちづくりの第3期にあたります。

この結果、住吉地区では、青少年会館、解放会館（現在の市民交流センターすみよし北）、保育所、総合福祉センターなどの公共施設が、地区内の中央・南北軸にそって建てられ、それを取り囲むようにして住宅（半数が3層の低層住宅）が配置され、極めて住みやすいまちづくりが実現したのです。

また、この時期には、仕事保障にも力が入れられ、給食調理員、ヘルパー、保育士、教員などが次々と誕生していきました。

まちづくりの6つの原則の中でも、①住民が永住するまちづくり、②障害者、高齢者、子どもなどの弱い立場の人びとが安心して暮らせるまちづくり、③近隣地区住民にも開かれたまちづくりという点が、重視されたことが特徴です。

- ①我々が永住する町である。
- ②すべての地域住民を対象にする町づくりである。
- ③人間のつながりを大切に作る町づくりである。（差別と闘う団結の町）
- ④住民の健康をまもるまちづくりである。
- ⑤子ども・老人・障害者がのびのびと生活できる町づくりである。
- ⑥近隣住民に開かれた町づくりである。

2002年3月末に、部落問題に関わった「特別措置法」が終了しました。しかしながら部落差別が解消されたわけではありません。インターネット上ではひどい差別情報が流されていますし、不動産売買などの面で部落を忌避する差別事件も多発しています。また、せっかく高まってきた部落の生活水準や高校・大学の進学状況についても、若干低下する傾向が見られます。さらに、自治体の財政難が深刻化する中で、これまで実施されてきた事業の縮小が図られてきています。

その一環として、大阪市内では、人権文化センター、青少年会館、老人センターの3館を一つに統合する方針が出されました。住吉地区では、人権文化センターに3つの機能が統合されました。しかも人権文化センターが、2010年4月から市民交流センターへと名称が変更され、それぞれのセンターごとに指定管理方式が導入されることとなりました。市民交流センターすみよし北については、財団法人住吉隣保館が大阪市人権協会と共にこれを受託することとなりました。なお、3館統合により、住吉地区においても青少年会館が閉鎖されることになりましたが、付設体育館については、住吉支部や利用者が中心になって大阪市教育委員会や住吉区選出の市議員に要請行動を展開した結果、2010年6月から市民供用が再開されました。この経験は、これからの住吉地区におけるまちづくりに取り組んでいく上で、多くの教訓をもたらしてくれました。

財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年を迎えた今日、3館統合に象徴されるこれまでの事業が見直される中で、住吉地区は、新たなまちづくり、第4期のまちづくりに取り組

むことが求められています。このためには、なによりもまずこれまで住吉地区をよくするために取り組んでこられた故住田利雄さんを始めとする先人の経験からしっかりと学ぶことが必要だと思っています。

その際、部落差別を撤廃し、すべての人が人として尊重されるまちをつかっていくとい原点を大切にしていきたいと思っています。また、①障害者や高齢者、子どもなど弱い立場に置かれている人が安心して暮らしていけるまちづくりであること、②教育を高め安定した仕事を保障していくことを重視したまちづくりであること、③隣接地域の人びとにも開かれたまちづくりであること、④住吉地区住民が参画したまちづくりであること、を重視していきたいと思っています。

また、これからのまちづくりは、これまでのように、100パーセント行政に実施を求めていくのではなく、国や自治体だけでなく、民間（企業やの民間団体）の力、専門家の力、そして地元住民の力を合わせていくことが必要だと思っています。

おりしも、設立50年を迎えた財団法人住吉隣保館も、国の法人制度改革の流れを受けて、再度公益財団法人としての認可を得るための申請作業を精力的におこなっています。その際、建物としての住吉隣保館は現在存在していませんが、隣保館活動の精神を引き継いでいくために「住吉隣保事業推進協会」という新たな名称で申請を行う予定です。そして、新たな財団が取り組む事業としては、①市民交流センターすみよし北の管理運営事業、②体育館の市民供用のため事業、③各種相談活動の実施、④部落解放、人権確立に役立つ活動への助成、⑤住吉地区の新らたなまちづくりへの参画等に取り組んでいく決意です。

つきましては、本日の記念集会にご参加いただきました皆様の旧に倍するご支援を御願い致しまして、記念集会開催にあつたつのごあいさつと致します。

2011年10月29日

追記：昨年末、公益財団法人住吉隣保事業推進協会としての認可を申請する書類を大阪府公益認定等委員会へ提出しました。本年1月20日に審査委員会が開催され、公益財団法人としての認可が承認されました。現時点では、本年4月1日から、これまでの財団法人住吉隣保館は、あらたに公益財団法人住吉隣保事業推進協会として名称を変更し事業を実施していく予定です。詳しくは、次号で新公益財団法人への移行について報告致します。

財団法人住吉隣保館ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>